



コンストラクティビズム研究の先端 : 規範のライフ サイクル・モデルを越えて

政所, 大輔
赤星, 聖

(Citation)

神戸法學雑誌, 67(2):147-178

(Issue Date)

2017-09

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81009995>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81009995>



神戸法学雑誌第六十七巻第二号二〇一七年九月

コンストラクティビズム研究の先端 ——規範のライフサイクル・モデルを越えて——

政 所 大 輔

赤 星 聖

はじめに

過去30年の国際関係論において、コンストラクティビズム（構成主義）が理論的なアプローチの一つとして定着してきた。コンストラクティビズムに依拠する研究は、その多くが、国際規範がアクターの意思決定や行動に及ぼす影響や、アクターが規範を形成し国際的に伝播させるプロセスを理論的、実証的に解明することを目的としてきた（Acharya 2004; Bettiza and Dionigi 2015; Deitelhoff 2009; Finnemore and Sikkink 1998; Katzenstein 1996; Kelley 2008; Klotz 1995; Price 1998）。日本でも、コンストラクティビズムの枠組みを明示的に用いた研究が増え、国際的な研究動向を概観し、事例研究によってその理論的な仮説やモデルを実証する研究もみられるようになった（足立 2015a; 大矢根 2013; クロス 2016; Madokoro 2015）。一方で、2000年代半ば以降、コンストラクティビズム研究には新たな理論的展開がみられるにもかかわらず、その研究動向を整理し、理論的な発展の可能性について検討した論稿は、ほとんど存在しない。

本稿は、コンストラクティビズムのこれまでの研究について整理・考察し、

特に2000年代半ば以降の研究動向を踏まえ、そのアプローチを発展させる際の方向性を示すことを目的とする。初期のコンストラクティビズムはエージェントと構造の相互構成を強調したが、その後、実証研究への応用が強く意識された結果、エージェントと構造の相互構成のうち一方向にのみ着目した研究が蓄積されてきた。すなわち、エージェントが構造を創出する過程を解明する「エージェント・コンストラクティビズム」(AC)と、逆に構造がエージェントの行為を規制し構成する動態を分析する「構造コンストラクティビズム」(SC)に大きく分かれたのであった(Sikkink 2011a)。その中で、前者はエージェントが用いる多様な戦略や様々なメカニズムの特定に注力し、特に規範をめぐるエージェント間の政治的関係性や「論争」(contestation)に着目してきた(Bob 2012; Wiener 2014)。一方で、後者は構造とエージェントの相互構成というコンストラクティビズムの原点に再度注目するようになってきた(Kim and Sharman 2014; S. Schmidt 2014)。また、比較政治学に目を向ければ、コンストラクティビズムと親和性の高い理論的アプローチが登場しつつある(例えば、V. Schmidt 2010)。

こうした研究動向を踏まえ、本稿は今後の研究の方向性として、①規範をめぐる政治性、②エージェントと構造の相互構成、③比較政治学との相互学習の三つに着目する必要性を指摘する。以下ではまず、これまでのコンストラクティビズム研究の展開を概観したうえで、AC、SC、比較政治学との関係について、順を追って研究動向を整理し、今後の研究の方向性を提示する。

1. 2000年代前半までのコンストラクティビズム研究の展開

1980年代に登場したコンストラクティビズムは、その後、大きく四つの段階を経て展開してきた⁽¹⁾。第一は、1980年代のオヌフやクラトチウシル、ウエ

(1) Thomas Risse, comments as a discussant at the panel of “The Unsteady Life of International Norms,” the 2016 International Studies Association Annual Convention, Atlanta, 19 March 2016.

ントといった、事象の社会的構成や構造とエージェントの相互構成を存在論として明確に意識する論者が登場した萌芽的な段階である (Kratochwil 1989; Kratochwil and Ruggie 1986; Onuf 1989; Wendt 1987)。これら論者は、国際関係におけるアイデアやアイデンティティーなどの非物質的な要素の重要性を指摘した。第二の段階は、1990年前後から90年代半ばにかけてであり、国際政治における観念的な要素の意義を実証的に解明する研究が現れた (Checkel 1997; Goldstein and Keohane 1993; Katzenstein 1996; Nadelmann 1990; Risse 1994)。そこでは多くの場合、「特定の共同体における、適切な行為をめぐる共通の期待」として定義される規範が分析の対象となった (Finnemore 1996, 22-24)。

第三の段階では、1990年代後半から2000年代前半にかけて、規範が国際的に伝播するプロセスや因果メカニズムを解明する研究が盛んになった (Checkel 2001; Finnemore and Sikkink 1998; Johnston 2001; Keck and Sikkink 1998; Payne 2001; Price 1998; Risse 2000; Risse et al. 1999)。特に、新しい規範を提唱し推進する「規範起業家」(norm entrepreneur) による説得や社会化のメカニズムを基礎として、ライフサイクル・モデルやブーメラン・モデル、スパイラル・モデルなどが提示された。最後の第四の段階では、2000年代半ば以降、アクター間の論争や規範の変化を分析する研究が主流になってきた⁽²⁾。本稿は、この第四段階のコンストラクティビズム研究について整理し考察する。

これまでのコンストラクティビズム研究の中で、最も認知度が高く、また多くの研究者によって頻繁に用いられてきた分析枠組みの一つが、フィネモアとシキンクによる「規範のライフサイクル・モデル」である (Finnemore

(2) 当然、本稿の四分類以外にも整理の仕方は存在する。例えば、本稿の第一段階と第二段階を合わせて「構造的アプローチ」、第三段階を「戦略的アプローチ」、2000年代半ば以降の研究動向を「感情的 (sentimental) アプローチ」と分類し、認知的な動きに先行する情動的な影響に着目した心理学的な研究領域として、感情的アプローチの重要性を強調する論者もいる (Widmaier and Park 2012)。

and Sikkink 1998)⁽³⁾。このモデルに基づけば、規範は三つの段階を経て国際的に伝播することになる。すなわち、規範起業家が他アクターに対して説得を行う「生成」(emergence)の段階、決定的多数の国家によって承認された規範が「臨界点」(tipping point)を越えて急速かつ広範に広がっていく「カスケード」(cascade)の段階、当該規範が当然のものとされ公的な議論にかけられることのなくなる「内面化」(internalization)の段階である。ライフサイクル・モデルが提示されて以降、主に同モデルを批判し修正するかたちでコンストラクティビズムの理論的な展開が起り、次節以降で整理するように、ACとSCがそれぞれ発展してきた⁽⁴⁾。

2. エージェント・コンストラクティビズム (AC) — 規範をめぐる政治性⁽⁵⁾

コンストラクティビズムに基づく初期の実証研究は、国際政治における規範の意義を説得的に示すために、規範が諸国家の行動にどのような影響を及ぼすのかを解明した。こうした構造的な説明に対してチェックルは、その存在が当然視されている規範がそもそもどのように生み出されるのかや、それがどのように変化するのかを理解するにあたっては、エージェントに着目する必要があると批判的に指摘した (Checkel 1998, 339)。このような批判を受けて、規範の生成や伝播のプロセスを分析するために提示されたのが、規範起業家の視座

- (3) Google Scholarによれば、2017年9月末時点で、6400を超える文献がこの論文を引用している。
- (4) 他方、規範のライフサイクル・モデルは、規範起業家の役割よりもカスケードが生じるメカニズムに主眼があったため、エージェントの役割を十分に可視化することができず、その後の研究の多くが構造的な説明へと偏重するきっかけとなったと指摘する研究もある (Bucher 2014)。
- (5) 本稿において政治性とは、特定の規範をめぐり異なるアクター同士が駆け引きや取り引きを通じて交渉したり、互いの主張を戦わせて一定の結論を導いたりする状況のことを意味する。

であった。それ以降、規範起業家の類型化や彼らが用いる戦略やメカニズムの特定がなされるなど、今日までコンストラクティビズムの主要な枠組みの一つとなっている。

こうした初期のAC（伝統的AC）は、様々に批判されてきた⁽⁶⁾。まず、単線伝播バイアス批判である。伝統的ACは規範が間主観的に形成されると主張したにもかかわらず、彼らが提示したモデルや仮説、あるいは事例分析では「不変かつ明確な内容を持つ安定的なもの」として規範が捉えられてきた（Hofferberth and Weber 2014, 80）。その結果、規範の生成と伝播のプロセスは、規範を受容するか拒絶するかの二者択一であり、単線のかつ静的なものとして暗黙裡に想定されてきた。第二の批判は、リベラル・バイアスである。伝統的ACは、人権や人道、環境といった欧米的な価値観が色濃く反映された規範を伝播の成功例として主に分析してきたため、これら諸規範の影響力や結果が過大評価され、規範の伝播が「良いこと」であるかのように認識されてきた。そこでは、社会化の対象となるアクターを「幼児化」（infantilize）することが含意され（Epstein 2012）、現代の規範秩序の植民地支配的な押し付けをはじめとするグローバルな不正義の構造が等閑視される（Inayatullah and Blaney 2012）など、規範の持つ負の側面が看過されてきた⁽⁷⁾。さらに第三の批判として、決定論的な構造バイアスが挙げられる。伝統的ACは、エージェントの役割を強調する一方で、規範起業家が説得や社会化を通じて新たな規範を拡散するにあたっては、「適切さの論理」（logic of appropriateness）に依拠すると主張した。しかしこの説明では、エージェントのとるべき行動が規範の適切さによって自動的に決まることになり、彼らが特定の状況や規則を様々に解釈する余地がなくなるため、エージェントの行為を正確に可視化することができない（Sending

-
- (6) 本稿では、第三段階までのACを伝統的AC、伝統的ACを批判して登場した第四段階のACを批判的ACと呼ぶ。具体的な違いについては表1を参照。
- (7) 伝統的ACによる国際規範の倫理的な限界や可能性の考察、従来のコンストラクティビズムが分析対象としてきた「進歩的な倫理的变化」の擁護については、Price 2008を参照。

2002)。また、適切さの論理に従ったエージェントが新たな規範を創出することが理論上不可能となり、相互構成というコンストラクティビズムの存在論が成立しなくなってしまう⁽⁸⁾。

以上のような批判は、ACの理論的な発展を促し、①現地化、②論争、③規範抵抗者というACの新たな視座を生むこととなった⁽⁹⁾。まず、規範起業家による説得と社会化を通じて規範が単線的に拡散するとしてきた伝統的ACの前提に対し、国内アクターが国際規範を各国の文化や規範に沿って「現地化」(localization)する多様なプロセスを描写する論者が登場した(Acharya 2004; Zimmermann 2016; Zwingel 2012)。またアチャリアは、国際規範を現地化した国内アクターが今度は国際規範に対して影響を及ぼすメカニズムを提示し、現地アクターのより積極的な役割を解明した(Acharya 2011; 2013)。さらに、それまで単なる社会化の対象とされてきたアクターの役割を再検討することは、規範がいわゆる第三世界から世界的に拡散するという「下からの」伝播プロセスを説得的に示す研究にもつながった(Bettiza and Dionigi 2015; Steinhilper 2015; Towns 2012)。こうした一連の理解は、エージェント間の関係に必ずしも注意を払わなかった伝統的ACに対して、エージェント間の政治的・経済的な関係を浮き彫りにし(MacKenzie and Sesay 2012)、社会的なヒエラルキーが規範の生成と伝播に影響する場合があることを明らかにした(Towns 2012)。

現地化のメカニズムは国際規範が伝播するプロセスでその意味内容を変化させる可能性を指摘し、また「下からの」伝播プロセスを可視化するものの、最終的には当該規範が何らかのかたちで拡散することを想定していた⁽¹⁰⁾。そ

-
- (8) 他方、様々な規範が指し示す適切さの範囲内でエージェント同士が討議を行うことによって、「理にかなったコンセンサス」(reasoned consensus)に到達することが可能であるとする議論もある(Risse 2000)。
- (9) 伝統的ACへの批判はそれぞれ相互に関連しているため、その後の理論的な展開が必ずしも各批判に個別に対応するかたちで起きたわけではない。
- (10) 理論上、現地化には現地アクターが国際規範を拒絶するという選択肢も含まれる。しかし、既存の多くの事例研究では現地化を通じて規範が拡散するプロセスが描かれてきた。

ここで現れたのが、規範の伝播プロセスに参画する多様なアクター間で繰り返される「論争」を重視する研究である。論争とは、「規範の実際上の意味（meaning-in-use）をめぐる批判的な言説的实践」を意味する（Deitelhoff and Zimmermann 2013, 3; Wiener 2014）。論争は、特定の規範をめぐる安定と変化の間の緊張関係にかかわるものであり、ここでいうところの規範の安定は、その意味内容が固定され社会に定着した状態を指す（Nieman and Schillinger 2017, 30-31）。現地化と異なり論争は、国際規範が最終的に必ずエージェントによって受容されることを含意しない。仮に条約や決議などの公式の規範が存在したとしても、その意味内容に関して社会的な共通理解が欠如していれば、当該規範が誤解されたり軽視されたりしやすくなるため、いかなる場合でも論争は起こりうる（Wiener 2004, 200; Wiener and Puetter 2009, 7）。したがって、論争を通じて、規範が徐々に精緻化されたり意味内容が変化したりすることで正当性が高まり国際社会においてその共有が進む場合もあれば（Krook and True 2012; Lantis 2016; Weiss and Badescu 2010）、規範の衰退や消滅に至る場合もある（Heller et al. 2012; Panke and Petersohn 2011; Percy 2007⁽¹¹⁾）。

このように、2000年代半ば以降のACは、批判理論やポスト構造主義的な観点を導入することによって、規範をめぐる論争の様相を描写してきた。しかし、こうした描写自体の貢献は大きいものの、論争と規範との実証的な関係—例えば、論争が生じることによってどのような場合に規範がさらに拡散するのか—については明らかでなかった。これに対してデイトルホフとジマーマンは、規範をめぐる論争を実証的に捉えようと試みた（Deitelhoff and Zimmermann 2013）。彼女らによれば、規範のどの部分について論争が生じているのかが重要である。すなわち、規範の原理的な部分についての論争であれば当該規範の安定性が揺らぎ、衰退や消滅につながりやすいが、実際問題への規範の適用方法に関する論争であればその安定性が揺らぐことはほとんどなく、むしろ規範

(11) 前者については、論争自体を「良いもの」として捉えているという批判的な指摘が存在する（Wolff and Zimmermann 2016）。

が強化される場合もある。ジェノサイドや深刻な人道危機からの市民の保護を国家と国際社会に求める「保護する責任」の規範を例にとれば、関連する国連決議の採択や総会における議論を通じて当該規範の原理的な部分については異論がほぼなくなりつつあり、現在は主にその適用の仕方をめぐって論争が生じている段階である（政所 2017; Welsh 2013; Ziegler 2016）。

他方、現地化や論争をめぐるといった理論的検討の多くは、結果的には何らかの新たな規範的变化が生じるという前提に立っており、現行の規範秩序を変化させようとする試みに対して存在するはずの保守的な抵抗運動を軽視しているとされる（Bob 2012; Nuñez-Mietz and Iommi 2017）。この点に関してブルームフィールドは、規範的な変化を起こそうとする規範起業家の試みに抵抗し、既存の規範秩序を擁護しようとする「規範抵抗者」(norm antipreneur) の枠組みを構築した（Bloomfield 2016⁽¹²⁾）。ブルームフィールドによれば、規範抵抗者は、既存の法制度や法規範を強調して新たな規範に基づく前例が創出されるのを防いだり、拒否権プレイヤーの立場を生かして新規範を制度化しようとする試みに反対したりする。足立も同様に、「規範守護者」(norm protector) の分析視角を提示し、規範起業家による新規範の拡散に対抗する戦略（フレーミング破壊や接ぎ木の切断）を明らかにした（足立 2014）。こうした規範抵抗者や規範守護者の枠組みは、既存の規範を守ろうとするアクターの役割や戦略を理論化するものであり、伝統的 AC に対してなされたりベラル・バイアス批判や構造バイアス批判を乗り越えようとするものであるといえよう。

論争のメカニズムが導入されたことによって、規範の複雑かつ多様な動態の解明や、規範抵抗者・守護者の役割の可視化と概念化が可能になった（表1参

(12) 一方で、規範起業家が用いる暴力行為を伴う戦略の特定（Eilstrup-Sangivonni and Phelps Bondaroff 2014）や、大国の積極的な関与を引き出すために中小国や非政府組織（NGO）がとる戦略的行動の分析（Petrova 2016）、問題解決に資する様々な方策を駆使して規範の伝播を促す実用主義的（pragmatic）な役割の考察（Ralph 2017）、規範の生成に影響を及ぼすアクター間の関係性の解明（Carpenter 2014）など、規範起業家についての理論的な展開も継続している。

	伝統的 AC	批判的 AC
規範の性質	国際的かつ普遍的かつ進歩的	文脈依存のかつ負の側面を包含
規範の状態	安定かつ明確	不安定かつ不明確
規範の動態	単線的発展型（受容、拒絶）	複雑型（発展、現状維持、衰退）
アクター	規範起業家	規範起業家、規範抵抗者・守護者
メカニズム	説得、社会化	論争、現地化

表1. ACの特徴・想定と比較

照)。他方で、これまでのAC研究では必ずしも明らかでない点にも注意を払う必要があるだろう。第一に、規範の複数性である。伝統的ACと批判的ACはともに、一つの共同体における適切な規範は一つであるとの前提を暗黙裡に置き、規範起業家や規範抵抗者が掲げる規範こそが「適切な」規範であり、その他は「不適切な」規範であるという論理を組み立ててきた (Sikkink 2011b, 236)。したがって、そこでは、説得や論争が行われた結果、特定の「適切な」規範が他の「不適切な」規範に勝るというプロセスが想定されてきた。しかし現実には、例えば、ある問題をどのようにフレーミングするか、その選択肢は複数ありうるため、アクターが適切と考える規範をいくつかの規範の中から自由に選ぶことが可能であるはずである。また、詳しくは次節で述べるが、複数の規範が対立する場合には、これらの関係を「調整」して規範的な変化を起こそうとする試みがなされることがある。

第二に、規範をめぐる論争の中で特定の解釈や理解が有力となる要因や条件である。これまでの研究では、論争を通じて規範の意味内容が変化するプロセスが描写されてきたが、なぜ特定の意味に収斂するのかは明らかでなかった。これについては、例えば、規範伝播の初期段階では、多様な価値観やアイデンティティー、利害が混在する現実の国際社会において国家間で合意を形成するために、交渉や駆け引きといった従来のコンストラクティビズムが想定しなかった政治的なメカニズムが機能する場合があるとされる (Coleman 2013)。こうした多国間の合意は、そこに参加したアクターの共通理解が反映されているため、その後の説得や論争のプロセスにおいて当該合意に含まれる規範への

支持を拡大するための参照点として利用されやすい（政所 2017）。以上のような研究の方向性は、社会学の影響を強く受けてきたコンストラクティビズムに対して、規範をめぐる政治性に着目する意義を検討する必要性を（再）認識させることに繋がるだろう。

3. 構造コンストラクティビズム（SC）—エージェントと構造の相互構成

規範の展開過程におけるエージェントの役割を強調するACに対して、方法論的全体論（methodological holism⁽¹³⁾）を明示的に強調する立場はSCと呼ぶことができる（Barnett 2014, 158; Fearon and Wendt 2002, 52-53; Wendt 1999, 1）。その代表的な論者であるウェントは、アクターの行動や相互作用によって構造の説明が可能であるとする方法論的個人主義（methodological individualism）との対比において、構造とエージェントの相互構成を全体として分析することの必要性を提唱した。つまり、彼は、国際構造を「アイディア・知識の分布」と定義し、これらは国際社会において各アクターが持つ特徴（アイデンティティーや信念など）の総和ではなく、独自の実在性を持つと指摘した（Wendt 1999, 20-29⁽¹⁴⁾）。そのうえで、共有された理解・期待・知識（すなわち構造）が物質的資源やエージェント間の政治的関係性を意味づける一方で、構造自体もエージェントによる実践の中で変化するという「構造化」（structuration）のプロセスとして国際関係を捉えたのである（Wendt 1987, 355-361; 1995, 73-74）。

(13) エージェントと構造の関係において、構造は、エージェントおよびその相互作用に還元されえない、すなわちエージェント自体およびその相互作用の単なる寄せ集めではない性質を持つという立場を指す。

(14) なお、このような定義から国際構造というとき、多くの場合は国際規範を指すことになる。したがって、本節では構造と規範はほぼ同義語として取り扱い、本節で指摘する場合はその研究が利用している用語を尊重する。

しかし初期のSCによる分析は、規範に内在する行為の適切さによってエージェントの意思決定が導かれるとする「適切さの論理」を重視したため、文化決定論に近い静態的な説明を提示する傾向にあった（Hofferberth and Weber 2014, 6）。また、AC、特に規範のライフサイクル・モデルに基づく分析は、規範起業家たるエージェントの活動から議論を出発させたために、当該社会で既に共有されている既存の構造・規範を看過する傾向があったとも指摘されている（足立2015a, 31-33）。

このような展開を踏まえて、近年のSCは、①新規規範が出現する以前にエージェント間で共有されている既存規範を（改めて）分析対象に加えること、および、②文化決定論的な説明を避けること、この二点に着目し研究を蓄積してきた。これら二つの方向性は、方法論的全体論を堅持しつつ、元来の関心事である国際構造の変化を説明するという、コンストラクティビズムの原点回帰を志向し、その分析枠組みをさらに精緻化していく取り組みであったといえよう。以下、近年のSCの動向について整理してみたい。

一点目に関しては、以前から新規規範は「薄い空気」や「規範的真空」の中から登場するわけではないと指摘されてきたように、新規規範の動態はエージェントが既に属する社会における適切さや望ましさに左右される部分が大きい（足立2015a, 29; Finnemore and Sikkink 1998, 896）。しかし、ACは、規範起業家が利用する戦略としての規範の接ぎ木（Price 1998）やフレーミング（Finnemore and Sikkink 1998, 897; Snow, et al. 1986）を指摘してきたものの、その成功条件であった既存規範との共鳴をブラックボックス化していた。したがって、既存の構造・規範の特徴を分析枠組みに明示的に組み込むべきだと主張する研究が増加してきたのである（Bjola and Kornprobst 2014; S. Schmidt 2014）。

例えば、キムとシャーマンは、既存構造として「近代文化」を特定し、その中に存在する個人主義的な考え方を基盤としてエージェントが説得活動を行った結果、人権や汚職などの問題領域において個人の責任を追及する規範が誕生してきたと論じた（Kim and Sharman 2014）。足立も、騎士道やヨーロッパ国家間社会の礼儀規範、文明といった概念が、種々の兵器規制規範の伝播に影響

を与えたことを明らかにし、新規規程が出現する社会において既に共有されている既存規程から議論を出発するべきだと主張した（足立 2015a）。また、構造要因に着目することによって、国際規程の動態に関して「奥行きがありマクロで長期的な」理解が可能になるという利点もあるとされる（Kim and Sharman 2014, 425）。

このような既存規程への着目は、その曖昧さや（O'Mahoney 2013, 835; Van Kerbergen and Verbeek 2007, 219）、規程自体の複合性への関心を集めることにもつながった（西谷 2017a, 8）。これらは、既存のSCが抱える二つ目の問題点である文化決定論的な説明を回避する試みとして理解できよう。つまり、「プロセスとしての規程」（Krook and True 2012, 103）、「変容し続ける規程」（足立 2015b）として概念化されるように、構造・規程自体が変化しようという重要な視座が（再）提示されたのである。

例えば、「完成品」としての規程が国際的に伝播するという規程のライフサイクル・モデルに対して、曖昧な意味を持つ規程であっても、その曖昧さゆえに様々なエージェントが当該規程を多様に解釈することが可能になるため、しばしば伝播や受容が促されるという指摘がある（Krook and True 2012, 109）。このような各エージェントによる戦略的かつ多様な解釈の提示によって、移行期正義における和解規程のような「多元的規程」が生み出された（クロス 2016）。他方、多様な解釈が存在しようということは、規程の意味や適用方法をめぐって各エージェント間で論争が繰り広げられるという議論にもつながった（O'Mahoney 2013, 838-839; Van Kerbergen and Verbeek 2007, 222; Wiener 2014）。例えば、人権レジームにおける表現の自由とプライバシー権の衝突など、同一レジーム内で複数の規程が衝突することによって、既存規程に対する疑義が生じ、内在的な議論が喚起されることで、その中から新たな規程を主張する規程起業家が登場すると説明されることがある（Kornprobst 2007; Sandholtz 2008, 105-106; Wunderlich 2013）。

このように、規程の多元化・複合化はその内部において生じる論争を含意するが、この論争の結果を、旧規程から新規規程への置換（Cottrell 2009）、ある

いは旧規範の存続・強化（足立2014; Bob 2012）として二項対立的に捉えるのはあまりに単純であろう。むしろ、規範の発展過程には、規範のライフサイクル・モデルが指摘する生成、カスケード、内面化の他に、規範の変容、逆行・退行、消滅なども含まれるし、規範間の関係性は、規範同士が競合するだけでなく、相互に補完し合い、また相乗効果を生む場合もありうる（西谷2017a, 8）。その中で、規範の重複・錯綜状況を避け、どのようにそれらを「調整」（reconciliation）するのか、そのメカニズムを明らかにしようとする研究も近年盛んになりつつある。

例えば、規範起業家は規範を作成するだけでなく、競合する規範間の調整を行う接着アイデアを提示し、規範を翻案したり、編集したりする役割も担うとされる。その接着アイデアの一例として挙げられるのが、人道的介入と国家主権・内政不干渉原則という競合する規範を調整するために作り出された保護する責任概念である（栗栖 2005）。また、企業の社会的責任（CSR）規範の発展を事例として、規範の錯綜状況を調整する複合規範は、それに関与するステークホルダーによる知識の交換やベストプラクティスの蓄積によって協働学習が促され、共同開発されると論じる研究もある（三浦 2005）。近年では、このような調整を、規範起業家が直接行うのではなく、オーケストレーターと呼ばれるアクターが、目的を共有し自発的な協力を提供する中間組織（intermediaries）を動員して、間接的に行うというオーケストレーション論にも注目が集まっている（Abbott et al. 2015）。例えば、腐敗防止規範や企業と人権に関する国連の規範枠組みの調整は、オーケストレーターと中間組織の協働によって行われたとされる（西谷2017b; 山田2017）。

最後に、SCの一潮流として、構造への再注目、エージェントが行う行為の論理として指摘されていた結果の論理、適切さの論理（March and Olsen 1998）、討議の論理（Risse 2000）に加えて、慣行（practice）に基づく論理を提示することにもつながった（Adler and Pouliot 2011; Pouliot 2008; 2016）。アクターによる費用便益計算や説得、討議といった意識的な行為を重視する前者三つの論理に対して、慣行の論理によれば、ある慣行的行為は特定の文脈にお

ける背景知識や共通理解を無意識に表出したものであると捉えられる。つまり、背景知識や共通理解を「構造」とみなし、エージェントがそれを無意識に繰り返し表出することで、構造が再強化されることになる。さらに、脳の「自動的な認知プロセス」(automatic cognitive process)の結果生じる行動としての習慣(habit)に焦点を当てた習慣の論理は、慣行の論理以上に無意識であることを強調した(Hopf 2010; Glas 2016)。すなわち、習慣がエージェントの行動を無意識に制約することで、その論理が支配する状況においては社会変化が生じにくいと想定している。こうした慣行の論理や習慣の論理は、実証研究上の難しさはあるものの、適切さの論理を体現する国際規範に関する研究が主であったコンストラクティビズムに対して新たな行為の論理を提示したものであり、研究の理論的射程を広げることに貢献したといえよう。

近年のSCは、完成品としての新規規範の伝播を扱った規範のライフサイクル・モデルへの批判として、既存規範への着目、規範の変容可能性という重要な視座を(再)提示した。SCの発展は、コンストラクティビズムにとって、その方法論的全体論としての立場を再確認し、元来の関心事である国際構造の変化に着目するという、原点回帰を図ったものであると理解できる。さらに、このような近年のSCの動向は、ACが提示した規範起業家や規範抵抗者の視座と組み合わせることで、規範の多元化・複合化過程と収斂化過程の双方を統一的に説明する枠組み⁽¹⁵⁾を提示しうる可能性を秘めていると、より積極的に意義づけることもできよう。つまり、既存規範への着目、規範の変容可能性という二

(15) 慣行の論理、習慣の論理が無意識を強調しすぎていることに対する批判も存在する(Karp 2013; S. Schmidt 2014)。

(16) 類似の枠組みとして、「規範の循環」(norm circulation)や「規範のフィードバックループ」モデルが存在する(Acharya 2013; Prantl and Nakano 2011)。ただし、これらの枠組みは、循環あるいはフィードバックという用語から想定されるように、既存規範の自己修正的なプロセスを前提としている(Prantl and Nakano 2011, 210)。しかし、収斂化過程は、既存規範の自己修正が起こるだけでなく、先述の接着アイデアが示唆するように、他の規範と連結することによって新規規範が生み出されるなど、より多様なプロセスが考えられる。

つの視点を用いることによって、曖昧かつ変容可能性を持つ規範が各エージェントの戦略的かつ多様な解釈によって複合化・多元化しうる一方、複合化・多元化した規範が今度は規範起業家やオーケストレーターによって調整され収斂されていくという、一連のプロセスを分析することが可能になると考えられる。

あまりに影響力が強かった規範のライフサイクル・モデルへの批判として近年のSCが発展してきたこともあり、本節で整理してきた各概念・枠組みが現時点で有機的につながっているとは残念ながら言い難い。また、分析対象となる既存規範を、恣意性を排して客観的に特定し、さらにエージェントと構造の相互作用をトートロジーに陥らないよう分析することは極めて難しく、実証上の困難さも付きまとう。とはいえ、持続可能な開発目標（SDGs）、人道支援ガバナンス、気候変動に関するパリ協定など、国際社会には複合化・多元化した規範が多数存在し、それらの遵守・履行が必要とされている現在、規範の複合化・収斂化過程を統一的に分析する枠組みは、理論的にも実証的にも有意義なものとなりうる。近年のSCの発展はその枠組みの構築に対する貢献が可能であり、その体系化こそが今後の課題となろう。

4. 比較政治学との接近？—統合的なりサーチ・プログラムの可能性

「コンストラクティビズムは新世紀のパラダイム戦争（paradigm war）の最前線にある」（Lichbach 2009, 62）。『『構成主義（constructivism）』は、21世紀の政治学にたいして大きなインパクトを与える可能性を有している」（小野 2009a, i）。「広義の政治学において、コンストラクティビズムの展開が最も早くから見られたのは、国際関係論・国際政治学の領域であった」（近藤 2013, 224）。これらはいずれも、国際関係論研究者ではなく比較政治学者による指摘であり、国際関係論におけるコンストラクティビズムを念頭に置いてなされたものである。前節まで論じてきたように、日本および海外でも、国際関係論においてコンストラクティビズムは、一つの理論的アプローチとして一定の地位

を占めるようになった。⁽¹⁷⁾ 他方、2000年代以降、比較政治学においてもアイデアの政治、構成主義的政治理論、言説的制度論と呼ばれる、国際関係論におけるコンストラクティビズムと同様の関心を持つ研究が登場し始めた。⁽¹⁸⁾

これらの研究が登場した背景には、比較政治学において主流となっていた合理的選択制度論、社会学的制度論、歴史的制度論という既存の新制度論が、変化よりも継続性を説明することに強みがあると考えられたということがあった(小野2009b, 8-9; 近藤2013, 224-225; 恒川2006; V. Schmidt 2010, 2)。したがって、言説的制度論は、アイデアや言説に着目し、「構成主義的に政治変化が導き出される過程に焦点を当てることによって、『政治的ダイナミクス』を含む政治分析が可能になる」(近藤2007, 38)と考えられ、注目を集めてきたのである。

言説的制度論は、コンストラクティビズムから理論的な影響を強く受けたと考えられる。その代表的論者であるシュミットは、以下の三点において、アイデアや言説といった観念的要素によって社会的現実が構成されると想定するコンストラクティビズムの研究成果に触れながら、言説的制度論の体系化

(17) 例えば、教育・研究・国際政策 (TRIP: Teaching, Research, and International Policy) プロジェクトが2014年に行った各国の国際関係論研究者を対象とした意識調査では、日本で19.25%、アメリカで19.55%、イギリスで20.48%の研究者が、自らのアプローチに最も近い理論的立場としてコンストラクティビズムと回答している。 <https://trip.wm.edu/charts/>, accessed on 2 September 2016.

(18) 以下、混乱を防ぐために、国際関係論におけるコンストラクティビズムは「コンストラクティビズム」を用い、比較政治学における同様の一連の研究は「言説的制度論」で代表させる。その理由は、比較政治学で影響力を持つ既存の新制度論 (Hall and Taylor 1996) への異なる見方を体系的に提示しようとした言説的制度論 (V. Schmidt 2008; 2010) を用いた方が、説明の一貫性が担保されやすいという便宜的理由のためであり、当然、アイデアの政治、構成主義的政治理論、言説的制度論には強調点の違いが存在する (小野2009b)。なお、比較政治学でも、外交政策分析を中心として、1990年代前半からアイデアや規範の役割に注目が集まっていた (Finnemore and Sikkink, 2001; Goldstein and Keohane 1993; Katzenstein 1996)。

を試みた（シュミット2009; V. Schmidt 2010）。すなわち、第一にウェントの「構造化」を存在論として共有し（Wendt 1987, 359-360）、第二に認識共同体（Haas 1992）やトランスナショナル・アドボカシー・ネットワーク（Keck and Sikkink 1998）といった制度変化を導くアクターに着目し、第三にレトリック行為（Schimmelfennig 2001）や討議の論理（Risse 2000）といった制度変化を引き起こすメカニズムを援用し、コンストラクティビズムを言説的制度論の理論的枠組みに組み込んだのである⁽¹⁹⁾。

言説的制度論の理論的發展とともに、特にヨーロッパ政治分析や福祉国家論において、その枠組みを用いて因果関係を把握しようとする実証分析も増加しつつある（宇佐美・牧野2013; 辻2014; Palmer 2010; V. Schmidt 2014）。この場合に利用される枠組みは、観念的要素の二つの役割、すなわち、観念的要素がアクターによる現実の解釈・認識の方向性を規定し、その利益を形作る「構成的役割」と、各アクターが観念的要素を用いて政治的な支持調達を試みる「因果的役割」を指摘したうえで、その双方を順を追って時系列で分析することを意図している（加藤2009, 164; 木寺2012, 33; Boswell and Hampshire 2017）。例えば、辻は、アクターによるアイディアの提示と政治的言説による正当化のプロセスを分析することで、あるべき「家族」像やジェンダー像が構成される局面（構成的役割）を扱い、また特定のアイディアを支持する政策連合の形成を通して、そのアイディアに基づく現代日本の「家族」をめぐる政策が規定される（因果的役割）と論じた（辻2012）。

とりわけ近年の言説的制度論が関心を持つのは、アイディアの因果的役割、すなわち特定のアイディアを実現するための支持調達戦略である（木寺2012、

(19) ただし、シュミットが研究対象としてきたのはヨーロッパ統合であり、冷戦期より国際関係論においても分析がなされてきた分野である。また、コンストラクティビズムとの親和性が見られる古典的な交流理論や安全保障共同体論もヨーロッパ統合から生み出された理論であった。ヨーロッパ統合は、アイディアや規範、コミュニケーションという内容が妥当しやすい事例である（more likely case）といえるかもしれない。

31; Boswell and Hampshire 2017)。ここで興味深いのは、シュミットが提示した、「調整的」(coordinative)言説と「伝達的」(communicative)言説の二分類であろう(V. Schmidt 2002)。前者は、政治的エリートの合意を調達するために、その討議のための枠組みを提供する役割を果たし、後者は、公衆を説得するために、ある政策を分かりやすく表現・翻訳する役割を担う(木寺2012, 37; V. Schmidt 2014, 199-205)。木寺はその調整的言説に着目し、日本における地方制度改革の成否を説明するにあたっては、外部専門家のアイデアが官僚に受け入れられるか否かが鍵となり、その条件として官僚が役所内で蓄積してきた現場知や「官庁文学」ともいわれる独特の行政文書の書き方などの「専門的執務知識」に外部専門家のアイデアをうまく接合させ、官僚の協力を得られるかどうか重要であったとした(木寺2012)。

以上のようなコンストラクティビズムと言説的制度論の接近は、実証的な政治分析の発展においてどのような意味を持つのであろうか。仮説の域を出ないが、この両者の接近は国際関係論と比較政治学の中の「相互」学習がさらに進んできた表れであると解釈できるかもしれない。2001年、フィネモアとシキンは比較政治学におけるコンストラクティビズム分析の可能性を示唆したものの(Finnemore and Sikkink 2001)、その時点では比較政治学と国際関係論が自覚的に相互学習をしていたわけではなかった。しかし、本節で検討してきたように、2000年代以降に比較政治学側は、アイデアや規範に基づいて構成主義的に政治変化を説明するアプローチを構築していたコンストラクティビズムに着目し、国際関係論で明らかになった知見を参照してきた。つまり、コンストラクティビズムと言説的制度論は、国際関係論・比較政治学という区別を越えて、(実証)政治学における一つの理論的アプローチとして、これまで以上に接近しつつあるといえるかもしれない。

その統合的なりサーチ・プログラムの方向性として考えられるのが、規範・政策・制度の国際的な複合化・多元化および収斂化過程の分析である。つまり、コンストラクティビズムの立場からいえば、前節で指摘した規範の多元化・複合化過程と収斂化過程の分析を指し、言説的制度論の立場からいえば、「制度

や政策の国際的収斂と国家間差異の間にある動態的な政治メカニズムの分析」を指している（近藤2013, 226）。

例えば、クロスは、国際規範が実行されるにあたって、国家が各々の事情に合わせて規範を解釈し政策化する（規範の多元化かつ政策の国家間差異）一方で、そのような多様な実行が集積され国際規範を再度形作る（規範の収斂化および制度・政策の国際的収斂）という一連のプロセスを分析している（クロス2016）。また近藤は、ヨーロッパ連合における「強制によってではなく、緩やかなかたちで一定の政策的方向へと加盟国間の収斂を促す」開放的調整方法（OMC）に着目し、ヨーロッパ雇用戦略（EES）が、スウェーデンやイギリスの積極的関与によって多国間で合意可能な政策となった（政策の国際的収斂）一方で、国内の労使団体の影響力など国内制度の影響を受けてその実施には国家間差異が生じたと論じた（近藤2013, 235-243）。このような方向性は、国際関係論および比較政治学双方が共通して取り組むことが可能な研究課題であり、クロスが分析した和解規範、近藤が分析したヨーロッパ雇用戦略に限定されない、多様な事例を説明することが可能であろう。

要するに、この研究課題においては国際関係論と比較政治学が相互学習する余地があると考えられる。コンストラクティビズムと言説的制度論は、それぞれにプロセスを記述する専門用語を持ち、因果関係を説明するメカニズムを提示するなど、相互に影響し合いながらも基本的には独立して発展してきた。しかし、両者は、規範あるいは制度・政策の国際的な伝播過程を扱い、その複合化・多元化・差異化と収斂化のプロセスを説明するという点で、類似したメカニズムを扱っている。そこにおいて、観念的要素の構成的役割と因果的役割を指摘し、調整的言説と伝達の言説という因果的説明の枠組みを提示する言説的制度論に、規範起業家などのエージェントが果たす役割や、既存の構造それ自体に対する注目、規範の論争や調整といった、コンストラクティビズムで提示された視角を統合することで、因果的説明を担保しつつ、よりニュアンスのあるプロセスの説明が可能になるのではないだろうか。このような分析枠組みの構築、またそれを実証するための方法論を確立することで、コンストラクティ

ビズムと言説的制度論は、ラショナリズムとは異なる政治現象の理解を提示することが可能になるといえよう。

おわりに

2000年代半ば以降のコンストラクティビズム研究は、エージェントの役割に重きを置くACと全体論的な説明を重視するSCに大きく分かれ、理論的な展開を遂げてきた。前者の研究が進んだことで、エージェント間の論争や新たな規範の伝播に強く抵抗するアクターの役割に焦点が当てられるようになり、今後の研究の方向性として、規範をめぐる政治性に着目する必要があるということが明らかになってきた。他方、SCの発展は、エージェントと構造の相互構成という原点に立ち返り、既存規範への着目、規範の変容可能性という重要な視座を（再）提示し、規範の多元化・複合化過程と収斂化過程の双方を統一的に説明する枠組みを提示しうる可能性を秘めている。また、比較政治学においては、コンストラクティビズムのアプローチを用いた言説的制度論が注目を集めるようになり、コンストラクティビズム自身もこうした研究を参照することで、各々が発展させてきた政治的なメカニズムや知見を相互に利用することが容易になりつつある。このように、コンストラクティビズムは、特に同一パラダイム内での批判的な検討を踏まえながら実証研究を積み重ねることによって、国際関係論において主要な地位を確立するまでになっている。

他方、過去およそ20年の間に、コンストラクティビズムとラショナリズムの間の論争を含む、いわゆる「イズム」論争は急激に下火になったといわれる(Adler 2013, 112)。しかしこのことは、コンストラクティビズム研究の停滞や同アプローチの説明力のなさを表しているのではない。むしろ、コンストラクティビズムが国際関係論における新興勢力として自らの存在を主張しなければならなかった立場から、一つの理論的パラダイムとしての地位を獲得したために、イズム論争から離れ、自らの理論的前提から導き出される分析枠組みやモデル、仮説を精緻化する段階に入ったことを意味している。本稿で整理した

ように、AC、SC、そしてコンストラクティビズム研究の影響を受けた比較政治学はそれぞれ、リアリズム、リベラリズム、またラショナリズムでは捉えることの難しい、観念的要素を媒介としたエージェントと構造の相互構成を解明するための枠組みを提示しようとしてきた。イズム論争の沈静化は、コンストラクティビズムがその理論的前提を内面化したうえで研究を前に進めようとしていることを示しており、まさに国際関係論における「当たり前」(taken-for-granted)の理論的アプローチの一つとなったことを意味しているといえよう。

参考文献

- 足立研幾, 2014. 「新たな規範の伝播失敗—規範起業家と規範守護者の相互作用から」『国際政治』176号, 1-13頁.
- 足立研幾, 2015a. 『国際政治と規範—国際社会の発展と兵器使用をめぐる規範の変容』有信堂.
- 足立研幾, 2015b. 「毒禁止規範から化学兵器禁止規範へ—『変容し続ける規範』という分析視角による事例研究」『グローバル・ガバナンス』第2号, 1-14頁.
- 宇佐美耕一・牧野久美子, 2013. 「新興国における年金改革に関するアイデアと言説の政治—南アフリカとアルゼンチンの事例」『日本比較政治学会年報』第15号, 33-68頁.
- 大矢根聡編, 2013. 『コンストラクティヴィズムの国際関係論』有斐閣.
- 小野耕二, 2009a. 「はしがき」小野耕二編『構成主義的政治理論と比較政治』ミネルヴァ書房, i-iv頁.
- 小野耕二, 2009b. 「『構成主義的政治理論』の意義—決定論からの離脱」小野耕二編『構成主義的政治理論と比較政治』ミネルヴァ書房, 1-29頁.
- 加藤雅俊, 2009. 「制度変化におけるアイデアの二つの役割—再編期の福祉国家分析を手がかりに」小野耕二編『構成主義的政治理論と比較政治』ミネルヴァ書房, 143-177頁.

- 木寺元, 2012. 『地方分権改革の政治学—制度・アイデア・官僚制』有斐閣.
- 栗栖薫子, 2005. 「人間安全保障『規範』の形成とグローバル・ガバナンス—規範複合化の視点から」『国際政治』143号, 76-91頁.
- クロス京子, 2016. 『移行期正義と和解—規範の多元的伝播・受容過程』有信堂.
- 近藤康史, 2007. 「比較政治における『アイデアの政治』」『年報政治学』第57巻第2号, 36-59頁.
- 近藤康史, 2013. 「比較政治学との対話—国際的収斂と国家間差異との間で」大矢根聡編『コンストラクティヴィズムの国際関係論』有斐閣, 223-245頁.
- シュミット・ヴィヴィアン, 2009. 「アイデアおよび言説を真摯に受け止める—第四の「新制度論」としての言説的制度論」小野耕二編『構成主義的政治理論と比較政治』ミネルヴァ書房, 75-110頁.
- 辻由希, 2012. 『家族主義福祉レジームの再編とジェンダー政治』ミネルヴァ書房.
- 辻由希, 2014. 「派遣労働再規制の政治学—『一般労働者の代表』をめぐる政党間競争」『レヴァイアサン』55号, 59-86頁.
- 恒川恵市, 2006. 「比較政治学における構成主義アプローチの可能性について」『日本比較政治学会年報』第8号, 37-62頁.
- 西谷真規子, 2017a. 「国際規範とグローバル・ガバナンスの複合的発展過程」西谷真規子編『国際規範はどう実現されるか—複合化するグローバル・ガバナンスの動態』ミネルヴァ書房, 1-20頁.
- 西谷真規子, 2017b. 「多中心的ガバナンスにおけるオーケストレーション—腐敗防止規範をめぐる国際機関の役割」西谷真規子編『国際規範はどう実現されるか—複合化するグローバル・ガバナンスの動態』ミネルヴァ書房, 201-251頁.
- 政所大輔, 2017. 「『保護する責任』規範の伝播—説得と交渉のメカニズム」『国際政治』187号, 131-146頁.
- 三浦聡, 2005. 「複合規範の分散革新—オープンソースとしての企業の社会的責任 (CSR)」『国際政治』143号, 92-105頁.

- 山田高敬, 2017. 「『企業と人権』をめぐる多中心的なガバナンスの試み—ステークホルダー間の知識共有と人権デュー・ディリジェンス規範の形成」西谷真規子編『国際規範はどう実現されるか—複合化するグローバル・ガバナンスの動態』ミネルヴァ書房, 23-58頁.
- Abbott, Kenneth W., Philipp Genschel, Duncan Snidal, and Bernhard Zangl (ed.), 2015. *International Organizations as Orchestrators*, New York: Cambridge University Press.
- Acharya, Amitav, 2004. “How Ideas Spread: Whose Norms Matter? Norm Localization and Institutional Change in Asian Regionalism,” *International Organization*, 58(2), 239-275.
- Acharya, Amitav, 2011. “Norm Subsidiarity and Regional Orders: Sovereignty, Regionalism, and Rule-Making in the Third World,” *International Studies Quarterly*, 55(1), 95-123.
- Acharya, Amitav, 2013. “The R2P and Norm Diffusion: Towards A Framework of Norm Circulation,” *Global Responsibility to Protect*, 5(4), 466-479.
- Adler, Emanuel, 2013. “Constructivism in International Relations: Sources, Contributions, and Debates,” in *Handbook of International Relations*, second edition, edited by Walter Carlsnaes, Thomas Risse, and Beth A. Simmons, London: SAGE, 112-144.
- Adler, Emanuel and Vincent Pouliot (ed.), 2011. *International Practices*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Barnett, Michael, 2014. “Social Constructivism,” in *The Globalization of World Politics: An Introduction to International Relations*, sixth edition, edited by John Baylis, Steve Smith, and Patricia Owens, Oxford: Oxford University Press, 155-168.
- Bettiza, Gregorio and Filippo Dionigi, 2015. “How Do Religious Norms Diffuse? Institutional Translation and International Change in a Post-secular World Society,” *European Journal of International Relations*, 21(3), 621-646.

- Bjola, Corneliu and Markus Kornprobst (ed.), 2014. *Arguing Global Governance*, Oxford: Routledge.
- Bloomfield, Alan, 2016. "Norm Antipreneurs and Theorising Resistance to Normative Change," *Review of International Studies*, 42(2), 310-333.
- Bob, Clifford, 2012. *The Global Right Wing and the Clash of World Politics*, New York: Cambridge University Press.
- Boswell, Christina and James Hampshire, 2017. "Ideas and Agency in Immigration Policy: A Discursive Institutional Approach," *European Journal of Political Research*, 56(1), 133-150.
- Bucher, Bernd, 2014. "Acting Abstractions: Metaphors, Narrative Structures, and the Eclipse of Agency," *European Journal of International Relations*, 20(3), 742-765.
- Carpenter, Charli, 2014. *"Lost" Causes: Agenda Vetting in Global Issue Networks and the Shaping of Human Security*, Ithaca: Cornell University Press.
- Checkel, Jeffrey T., 1997. *Ideas and International Political Change: Soviet/Russian Behavior and the End of the Cold War*, New York: Yale University Press.
- Checkel, Jeffrey T., 1998. "The Constructivist Turn in International Relations Theory," *World Politics*, 50(2), 324-348.
- Checkel, Jeffrey T., 2001. "Why Comply? Social Learning and European Identity Change," *International Organization*, 55(3), 553-588.
- Coleman, Katharina P., 2013. "Locating Norm Diplomacy: Venue Change in International Norm Negotiations," *European Journal of International Relations*, 19(1), 163-186.
- Cottrell, M. Patrick, 2009. "Legitimacy and Institutional Replacement: The Convention on Certain Conventional Weapons and the Emergence of the Mine Ban Treaty," *International Organization*, 63(2), 217-248.
- Deitelhoff, Nicole, 2009. "The Discursive Process of Legalization: Charting

- Islands of Persuasion in the ICC Case,” *International Organization*, 63(1), 33-65.
- Deitelhoff, Nicole and Lisbeth Zimmermann, 2013. “Things We Lost in the Fire: How Different Types of Contestation Affect the Validity of International Norms,” *PRIF Working Papers*, no. 18, December, 1-17.
- Eilstrup-Sangivonni, Mette and Teale N. Phelps Bondaroff, 2014. “From Advocacy to Confrontation: Direct Enforcement by Environmental NGOs,” *International Studies Quarterly*, 58(2), 348-361.
- Epstein, Charlotte, 2012. “Stop Telling Us How to Behave: Socialization or Infantilization?” *International Studies Perspectives*, 13(2), 135-145.
- Fearon, James and Alexander Wendt, 2002. “Rationalism v. Constructivism: A Skeptical View,” in *Handbook of International Relations*, edited by Walter Carlsnaes, Thomas Risse, and Beth A. Simmons, London: SAGE, 52-72.
- Finnemore, Martha, 1996. *National Interests in International Society*, Ithaca: Cornell University Press.
- Finnemore, Martha and Kathryn Sikkink, 1998. “International Norm Dynamics and Political Change,” *International Organization*, 52(4), 887-917.
- Finnemore, Martha and Kathryn Sikkink, 2001. “Taking Stock: The Constructivist Research Program in International Relations and Comparative Politics,” *Annual Review of Political Science*, 4, 391-416.
- Glas, Aarie, 2016. “Habits of Peace: Long-term Regional Cooperation in Southeast Asia,” *European Journal of International Relations*, *First View Article*, December, 1-24.
- Goldstein, Judith and Robert O. Keohane (ed.), 1993. *Ideas and Foreign Policy: Beliefs, Institutions, and Political Change*, Ithaca: Cornell University Press.
- Haas, Peter M., 1992. “Introduction: Epistemic Communities and International Policy Coordination,” *International Organization*, 46(1), 1-35.
- Hall, Peter A. and Rosemary C. R. Taylor, 1996. “Political Science and the Three

- New Institutionalisms,” *Political Studies*, 44(5), 936–957.
- Heller, Regina, Martin Kahl, and Daniela Pisoiu, 2012. “The ‘Dark’ Side of Normative Argumentation: The Case of Counterterrorism Policy,” *Global Constitutionalism*, 1(2), 278–312.
- Hofferberth, Matthias and Christian Weber, 2014. “Lost in Translation: A Critique of Constructivist Norm Research,” *Journal of International Relations and Development*, 18(1), 75–103.
- Hopf, Ted, 2010. “The Logic of Habit in International Relations,” *European Journal of International Relations*, 16(4), 539–561.
- Inayatullah, Naeem and David L. Blaney, 2012. “The Dark Heart of Kindness: The Social Construction of Deflection,” *International Studies Perspectives*, 13(2), 164–175.
- Johnston, Alastair Iain, 2001. “Treating International Institutions as Social Environments,” *International Studies Quarterly*, 45(4), 487–515.
- Karp, David Jason, 2013. “The Location of International Practice: What is Human Rights Practice,” *Review of International Studies*, 39(4), 969–992.
- Katzenstein, Peter J. (ed.), 1996. *The Culture of National Security: Norms and Identity in World Politics*, New York: Columbia University Press.
- Keck, Margaret and Kathryn Sikkink, 1998. *Activists beyond Borders: Advocacy Networks in International Politics*, Ithaca: Cornell University Press.
- Kelley, Judith, 2008. “Assessing the Complex Evolution of Norms: The Rise of International Election Monitoring,” *International Organization*, 62(2), 221–255.
- Kim, Hun Joon and J.C. Sharman, 2014. “Accounts and Accountability: Corruption, Human Rights, and Individual Accountability Norms,” *International Organization*, 68(2), 417–448.
- Klotz, Audie, 1995. *Norms in International Relations: The Struggle against Apartheid*, Ithaca: Cornell University Press.

- Kornprobst, Markus, 2007. "Argumentation and Compromise: Ireland's Selection of the Territorial Status Quo Norm," *International Organization*, 61(1), 69-98.
- Kratochwil, Friedrich V., 1989. *Rules, Norms, and Decisions: On the Conditions of Practical and Legal Reasoning in International Relations and Domestic Affairs*, New York: Cambridge University Press.
- Kratochwil, Friedrich and John Gerald Ruggie, 1986. "International Organization: A State of the Art on an Art of the State," *International Organization*, 40(4), 753-775.
- Krook, Mona Lena and Jacqui True, 2012. "Rethinking the Life Cycles of International Norms: The United Nations and the Global Promotion of Gender Equality," *European Journal of International Relations*, 18(1), 103-127.
- Lantis, Jeffrey S., 2016. "Agentic Constructivism and the Proliferation Security Initiative: Modeling Norm Change," *Cooperation and Conflict*, 51(3), 384-400.
- Lichbach, Mark Irving, 2009. "Thinking and Working in the Midst of Things: Discovery, Explanation, and Evidence in Comparative Politics," in *Comparative Politics: Rationality, Culture, and Structure*, second edition, edited by Mark Irving Lichbach and Alan S. Zuckerman, New York: Cambridge University Press, 18-71.
- MacKenzie, Megan and Mohamed Sesay, 2012. "No Amnesty from/for the International: The Production and Promotion of TRCs as an International Norm in Sierra Leone," *International Studies Perspectives*, 13(2), 146-163.
- Madokoro, Daisuke, 2015. "How the United Nations Secretary-General Promotes International Norms: Persuasion, Collective Legitimation, and the Responsibility to Protect," *Global Responsibility to Protect*, 7(1), 31-55.
- March, James G. and Johan P. Olsen, 1998. "The Institutional Dynamics of

- International Political Orders,” *International Organization*, 52(4), 943-969.
- Nadelmann, Ethan A., “Global Prohibition Regimes: The Evolution of Norms in International Society,” *International Organization*, 44(4), 479-526.
- Nieman, Holger and Henrik Schillinger, 2017. “Contestation ‘All the Way Down’? The Grammar of Contestation in Norm Research,” *Review of International Studies*, 43(1), 29-49.
- Núñez-Mietz, Fernando G. and Lucrecia García Iommi, 2017. “Can International Norm Advocacy Undermine Internalization? Explaining Immunization Against LGBT Rights in Uganda,” *International Studies Quarterly*, 61(1), 196-209.
- O’Mahoney, Joseph, 2014. “Rule Tensions and the Dynamics of Institutional Change: From ‘to the Victor Go the Spoils’ to the Stimson Doctrine,” *European Journal of International Relations*, 20(3), 834-857.
- Onuf, Nicholas Greenwood, 1989. *World of Our Making: Rules and Rule in Social Theory and International Relations*, Columbia: University of South Carolina Press.
- Palmer, James, 2010. “Stopping the Unstoppable? A Discursive-Institutionalist Analysis of Renewable Transport Fuel Policy,” *Environment and Planning C: Politics and Space*, 28(6), 992-1010.
- Panke, Diana and Ulrich Petersohn, 2011. “Why International Norms Disappear Sometimes,” *European Journal of International Relations*, 18(4), 719-742.
- Payne, Rodger A., 2001. “Persuasion, Frames and Norm Construction,” *European Journal of International Relations*, 7(1), 37-61.
- Percy, Sarah V., 2007. *Mercenaries: The History of a Norm in International Relations*, New York: Oxford University Press.
- Petrova, Margarita H., 2016. “Rhetorical Entrapment and Normative Enticement: How the United Kingdom Turned From Spoiler Into Champion of the Cluster Munition Ban,” *International Studies Quarterly*, 60(3), 387-399.

- Pouliot, Vincent, 2008. "The Logic of Practicality: A Theory of Practice of Security Community," *International Organization*, 62(2), 627-651.
- Pouliot, Vincent, 2016. *International Pecking Orders: The Politics and Practice of Multilateral Diplomacy*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Price, Richard, 1998. "Reversing the Gun Sights: Transnational Civil Society Targets Land Mines," *International Organization*, 52(3), 613-644.
- Price, Richard (ed.), 2008. *Moral Limit and Possibility in World Politics*, New York: Cambridge University Press.
- Prantl, Jochen and Ryoko Nakano, 2011. "Global Norm Diffusion in East Asia: How China and Japan Implement the Responsibility to Protect," *International Relations*, 25(2), 204-223.
- Ralph, Jason, 2017. "The Responsibility to Protect and the Rise of China: Lessons from Australia's Role as a 'Pragmatic' Norm Entrepreneur," *International Relations of the Asia-Pacific*, 17(1), 35-65.
- Risse, Thomas, 1994. "Ideas Do Not Float Freely: Transnational Coalition, Domestic Structures, and the End of the Cold War," *International Organization*, 48(2), 185-214.
- Risse, Thomas, 2000. "'Let's Argue!' Communicative Action in World Politics," *International Organization*, 54(1), 1-39.
- Risse, Thomas, Stephen C. Ropp, and Kathryn Sikkink, 1999. *The Power of Human Rights: International Norms and Domestic Change*, New York: Cambridge University Press.
- Sandholtz, Wayne, 2008. "Dynamics of International Norm Change: Rules against Wartime Plunder," *European Journal of International Relations*, 14(1), 101-131.
- Schimmelfennig, Frank, 2001. "The Community Trap: Liberal Norms, Rhetorical Action, and the Eastern Enlargement of the European Union," *International Organization*, 55(1), 47-80.

- Schmidt, Sebastian, 2014. "Foreign Military Presence and the Changing Practice of Pragmatist Explanation of Norm Change," *American Political Science Review*, 108(4), 817-829.
- Schmidt, Vivien A., 2002. "Does Discourse Matter in the Politics of Welfare State Adjustment?" *Comparative Political Studies*, 35(2), 168-193.
- Schmidt, Vivien A., 2008. "Discursive Institutionalism: The Explanatory Power of Ideas and Discourse," *Annual Review of Political Science*, 11, 303-326.
- Schmidt, Vivien A., 2010. "Taking Ideas and Discourse Seriously: Explaining Change through Discursive Institutionalism as the Fourth 'New Institutionalism,'" *European Political Science Review*, 2(1), 1-25.
- Schmidt, Vivien A., 2014. "Speaking to the Markets or to the People? A Discursive Institutional Analysis of the EU's Sovereign Debt Crisis," *British Journal of Politics and International Relations*, 16(1), 188-209.
- Sending, Olejacob, 2002. "Constitution, Choice and Change: Problems with the 'Logic of Appropriateness' and its Use in Constructivist Theory," *European Journal of International Relations*, 8(4), 443-470.
- Sikkink, Kathryn, 2011a. "Beyond the Justice Cascade: How Agentic Constructivism could Help Explain Change in International Politics," revised paper from a Keynote Address, Millennium Annual Conference, October 22, 2011. "Out of the Ivory Tower: Weaving the Theories and Practice of International Relations," London School of Economics, to be presented at the Princeton University IR Colloquium, November 21, 2011.
- Sikkink, Kathryn, 2011b. *The Justice Cascade: How Human Rights Prosecutions Are Changing World Politics*, New York: W. W. Norton & Company.
- Snow, David A., E. Burke Rochford, Jr., Steven K. Worden, and Robert D. Benford, 1986. "Frame Alignment Processes, Micromobilization, and Movement Participation," *American Sociological Review*, 51(4), 464-481.
- Steinhilper, Elias, 2015. "From 'the Rest' to 'the West'? Rights of Indigenous

- Peoples and the Western Bias in Norm Diffusion Research,” *International Studies Review*, 17(4), 536-555.
- Towns, Ann E., 2012. “Norms and Social Hierarchies: Understanding International Policy Diffusion ‘From Below,’” *International Organization*, 66(2), 179-209.
- Van Kersbergen, Kees and Verbeek Berjan, 2007. “The Politics of International Norms: Subsidiarity and the Imperfect Competence Regime of the European Union,” *European Journal of International Relations*, 13(2), 217-238.
- Weiss, Thomas G. and Cristina G. Badescu, 2010. “Misrepresenting R2P and Advancing Norms: An Alternative Spiral?” *International Studies Perspectives*, 11(4), 354-374.
- Welsh, Jennifer M., 2013 “Norms Contestation and the Responsibility to Protect,” *Global Responsibility to Protect*, 5(4), 365-396.
- Wendt, Alexander, 1987. “Agent-Structure Problem in International Relations Theory,” *International Organization*, 41(3), 335-370.
- Wendt, Alexander, 1995. “Constructing International Politics,” *International Security*, 20(1), 71-81.
- Wendt, Alexander, 1999. *Social Theory of International Politics*, New York: Cambridge University Press.
- Widmaier, Wesley W. and Susan Park, 2012. “Differences Beyond Theory: Structural, Strategic, and Sentimental Approaches to Normative Change,” *International Studies Perspectives*, 13(2), 123-134.
- Wiener, Antje, 2004. “Contested Compliance: Interventions on the Normative Structure of World Politics,” *European Journal of International Relations*, 10(2), 189-234.
- Wiener, Antje, 2014. *A Theory of Contestation*, Berlin: Springer.
- Wiener, Antje and Uwe Puetter, 2009. “The Quality of Norms is What Actors Make of It: Critical Constructivist Research on Norms,” *Journal of*

- International Law and International Relations*, 5(1), 1-16.
- Wolff, Jonas and Lisbeth Zimmermann, 2016. "Between Banyans and Battle Scenes: Liberal Norms, Contestation, and the Limits of Critique," *Review of International Studies*, 42(3), 513-534.
- Wunderlich, Carmen, 2013. "Theoretical Approaches in Norm Dynamics," in *Norm Dynamics in Multilateral Arms Control: Interests, Conflicts, and Justice*, edited by Harald Muller and Carmen Wunderlich, Athens: University of Georgia Press, 20-47.
- Ziegler, Charles E., 2016. "Contesting the Responsibility to Protect," *International Studies Perspectives*, 17(1), 75-97.
- Zimmermann, Lisbeth, 2016. "Same Same or Different? Norm Diffusion Between Resistance, Compliance, and Localization in Post-conflict States," *International Studies Perspectives*, 17(1), 98-115.
- Zwingel, Susanne, 2012. "How Do Norms Travel? Theorizing International Women's Rights in Transnational Perspective," *International Studies Quarterly*, 56(1), 115-129.